北小学校通信　１４号　　Ｒ７.１１.２８

北小 赤石

学校のめあて

心豊かで
たくましく
いつも進んで学ぶ子

℡ 25-4450　　http:// www.isesaki-school.ed.jp/kitasyo/

「世界といのちの教室」がありました

26 日（水）の 3・4 校時に赤石楽舎の体育館で、5・6 年生を対象に国境なき医師団の方々による「世界といのちの教室」の学習がありました。国境なき医師団というのは、世界中どこでも生命の危機に直面している人びとに直接医療が届けられるよう、独立・中立・公平の立場で医療・人道援助活動を行っている民間の非営利の団体です。昨年度は、世界 75 の国と地域で、医師や看護師をはじめ 5 万 2000 人のスタッフが活動をしたということです。

「世界といのちの教室」のプログラムは、大きく前半の「知る・学ぶ」と後半の「考える」の二部構成になっていて、前半の「知る・学ぶ」では、世界で起きている命の危機にはどのようなことがあり、そこで医療援助を必要としている人はどんな人たちなのか、さらに国境なき医師団はそこでどんな活動をしているのかを学びます。そして後半の「考える」では、自分が国境なき医師団の医者になり、人道援助の現場で直面する問題を自分事として考えるという活動を行います。自分で考えた後に、グループになってそれぞれの考えを交流しながら意見をまとめていきます。実際、子どもたちが考えた問題を紹介します。

ある国で戦争が起きていて、国の軍隊と反政府側の村が戦っていた。ある日、同じ伝染病にかかった二人の患者ＡとＢが同じときに運ばれてきた。

Ａの少年（１２才の子ども）は、国が治める地域の農家で家族と平和に暮らしていた。しかし、畑で作業をしていたときに虫に刺されて伝染病にかかってしまう。やがて農村が戦争に巻き込まれ、町の病院に行けなくなった。そこで警察官の父親によって国境なき医師団の病院に運ばれてきた。

Ｂの少年（１２才の子ども兵士）は、反政府側の貧しい村に生まれ育ち、両親を亡くし、一人で弟と妹の世話をみていた。村には病院も学校もなく、小さい頃から兵士として育てられ、たくさんの人の命を奪ってきた。ジャングルで戦っている時に伝染病にかかってしまい、武器も持たないまま国境なき医師団の病院の前で倒れていた。

二人とも急いで治療をしなければ命を落とす危険性がある。しかし、その病気の治療薬は一人分しか残っていない。そこで医者のあなたはどうするか。

この問題の正解はないのだと思いますが、本当に自分なりの答えを導き出すのは難しいことです。このような活動を通して、まずは自分の命の大切さに気づくと共に、世界の中には大変な状況の中で命をつないでいる人たちがいて、危険な状況に身を置きながら現地でその人たちの命を救おうとしている人たちがいることを子どもたちは学んだことと思います。

２時間の学習でしたが、5・6年生の子どもたちは、集中して話を聞き、講師の方から意見を求められたときには、積極的に手を挙げてたくさんの子が発表していました。また、最後に講師の方への質問がありましたが、時間いっぱいまでたくさんの質問が出されました。この子どもたちの学習に向かう姿勢にも感心しました。

最後にこの授業を通して5・6年生の子どもたちが感じたことを紹介します。

日本の現状や自分のことだけでなく、世界の現状、今、自分がこうやって幸せに暮らせていることは当たり前のようで当たり前じゃない、その恐ろしさや怖さ、そして世界のいろいろなところで戦争が起こっているということ。そこにかけつけて、ケガや病気の人を手当してあげたり、薬をだしたりなどをするのが国境なき医師団ということが分かりました。その中でもっとも大切にしているのは、独立、中立、公平、この３つだそうです。私も少しでも国境なき医師団の一員として自分が今できることをしていきたいと思いました。呼びかけや募金寄付をするなど。日本で幸せに平和に暮らせていることに感謝をしながら生きていきたいと思いました。

11／26 の「世界と命の授業」を聞いて、世界には私が知らないところで困っている人がたくさんいることを知りました。病気になっても病院に行けなかったり、薬がなかったりして、命が危ない人がいることを知って、とてもびっくりしました。国境なき医師団の人たちは、危険な場所で誰かの命を守るために働いていて、本当にすごいと思いました。自分だけのためじゃなくて、知らない国の人のために行動している姿はかっこよかったです。

私も今の生活が当たり前じゃないことを忘れずに、募金活動や何か人の役に立てることを見つけられたらいいなと思いました。これからも自分にできる小さなことを大切にしていきたいと思いました。